

# 桜工

理工学部60周年記念号

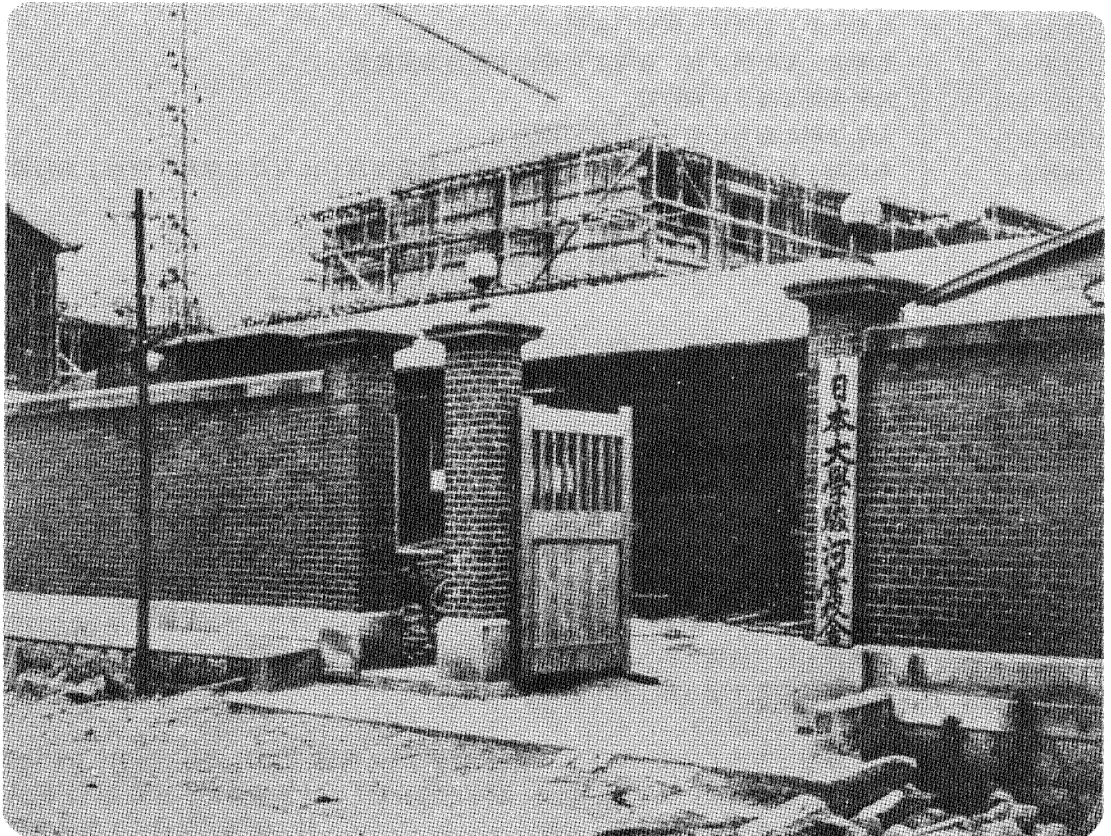
No. 62

1980

日本大学工科校友会

## 目 次

理工学部の沿革……………年 表……………	2
理工学部60周年を迎えて(学部長)……………加藤 渉…	4
会長あいさつ……………辰村 米吉…	4
「工学部」開設当時の諸先生……………谷口 清治…	5
戦前の学校……………神谷 正信…	6
思いでの記……………長井 郁郎…	7
草創期の教師像……………池森 亀鶴…	8
昔の高周波研究室の測定器……………林 満寿雄…	9
工業化学科設立の頃……………名取 康…	10
薬学科創設の頃……………黒柳 惣十…	11
薬学科が設立された頃……………石田 隆夫…	12



創設時代の駿河台校舎



## 理工学部

### 60周年を迎えて

理工学部長

加藤 渉

理工学部の前身である高等工学校の創立が大正9年(1920)であるから、昭和55年(1980)をもって満60周年を数え、いわば還暦を迎えたことになる。

ちかごろは平均寿命が延びたことから、とりわけ還暦を祝う習慣が目立たなくなったようだが、本来の意味を理解すれば古人の例に倣い大いに祝福すべき節目であることに違いない。数え年61才を期して、ふたゝび生まれた年の干支にかえる、つまりひとめぐりして初心に還ることであるとすれば、ここに60周年を期して、創立以来今日までの発展過程を省み、先人の業績に敬意を払い、それを今後の運営に生かしてゆくことは、きわめて意義あることだと思う。歴史の動かし難い事実として、60年以上の伝統を誇り得る理工系大学は、本学部を含めても東京大学、京都大学、東京工業大学、早稲田大学のみであり、こんにちわが国の科学技術界における指導者層は、ほとんどこれら五大学の出身者によって構成され、これは学会、産業界を問わず共通の現象といつてよい。しかし、60年にわたって積み重ねられてきた有形無形の伝統から生れた社会的信用に、適確に対応し続けてゆくためには、常に時代に即応する改革と内容の充実を図らねばならない。

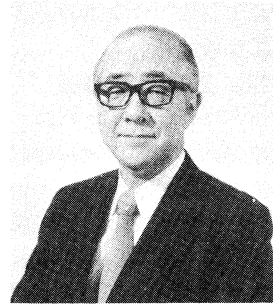
いずれにせよ、わが理工学部は常に停滞することなく発展と拡充をはかり続けてきたのである。

しかし60周年を期して、今後の展望から生れるあらたなる決意は、より一層の内容の充実であろう。

昨年度の本学部への入学志願者数は、他大学理工系学部が殆んど減少している中で、増加を示しているのは喜ばしい。

しかし、戦後発足した理工系新設大学といえどもすでに30年の歴史を重ね、優れた人材を世に送りだしているいくつかの大学があり、われわれは慢然と60年の伝統に甘んじていることは許されない。さいわい本学部は学生、教職員とも人材に恵まれており13学科の大組織を担当委員会制度などを活用することによって柔軟な運営が進められてきているので、今後とも教職員が一体となり、教学面の内容の充実を指標として鋭意努力したいと思う。

おわりに、先輩、校友諸氏の御鞭撻と御支援をお願いし挨拶に代える次第であります。



## 会長挨拶

工科校友会

会長 辰村米吉

本年は、日本大学理工学部の創設満60周年の年でもあります。併せて短期大学部工科の30年の年でもあります。

私共は、その創設期の困難や、関東大震災や第2次世界大戦を含む、その他幾多の困難があったことは、想像を絶するものがあったことゝ存じますが、それ等を見事に超えられた関係の方々、先人の英知と熱意に心から敬意を表し、同時に、今日の隆盛を見るに至った容姿に対し心から慶祝を申し上げたいと存じます。

又、短期大学部工科につきましては、法、文、経、工、第二工、芸の各学部が新制大学に移行した翌年、昭和25年に発足をしたもので、本年で30年の経過となり、これ亦誠に喜ばしい限りであり、心からお祝い申し上げます。

私共、工科校友会の会員は、高等工学校、旧制工学部、専門部工科、新制工学部、短期大学部工科、理工学部、大学院の卒業生から成っておりますが、大正9年に高等工学校が創設されたことが理工学部の60周年であるならば、工科校友会も、大正13年の第2回の卒業式の翌日、5月25日に駿河台校舎に於て高等工学校校友会が盛大に創立されたのを以て創始とすべきではないかと存じます。従いまして、工科校友会もあと、4年後には60周年を迎えることになるのであります。その時には我々も大いに祝うべきではないかと存じます。

今後、益々めまぐるしい変革の予想される時代に向けて、学内は勿論、学外にも理工学部のより一層の御発展を祈念いたしたいと存じます。

大学の本来の使命は自主研究にあって、大学は研究者と研究を通しての学習者の集団であるのは勿論であります。益々研究の実をあげ、学内に於ても学外に於ても、日本大学理工学部の名声を更に高めて頂きたいと存じます。加藤理工学部長の御方針もそこにあるように、うかがえますが、学部長が日本学術会議の会員として、学外に於ても大いに御活躍

## 薬学科が設立された頃

石田 隆夫

理工学部が創設され、60年を経過し、益々発展している事は、誠に喜ばしく、又心強く感じる次第であります。

一方私共の薬学科は、戦後の混乱期からようやく立直り、経済の発展期を迎えた昭和27年に設立されましたので 理工学部の歴史から見ると約半分を経過した所で作られた事になります。

戦中戦後の窮乏と統制の時代に育った私共は 自由と平和を満喫出来る様になり、ノビノビと青春を謳歌したものでした。とは言えあの南北に別れた朝鮮動乱が経済復興に役立った等と皮肉られた時代で、まだまだテレビの普及率も低く（始めは喫茶店と街頭に設置され面白い番組があると群集は黒山、私もその一人。）、「貧乏人は麦を食え」と首相が一般大衆に適切なアドバイスを送ったのは、それからまだ数年あと。と言う現在では考えられない様な発展途上国であったと記憶しています。

それはようやく学園生活にも慣れて来たある日の「クラス会」での出来事でした。「駿河台の校舎に実験教室がまだ来ていない様だ、一度見に行く必要があるのではないだろうか」と言う様な趣旨の発言がありました。しかし一方で「そんな事があり様

筈がない、第一学校側のやる事に干渉するのは越権行為にならないか、学校当局に任せておけ」と言う様な反論があり、大勢はその意見に従い駿河台に行かず1年を経過してしまいました。

そして移行、いよいよ専門課程の学問も、と希望を胸に駿河台に来てみますと、一部学生の心配は杞憂ではなかったのです。

実験室がまだ完成していない！

驚きと戸惑いと、そして未知のものへの不安が少々遠のいた安堵感が出来ていないものはしかたがないと云う諦めも混じって、妙なものでした。

三島、世田谷と教養部時代は知らなかった仲間同志も次第に融和した頃、早くも夏休みとなりました。実験室は暑いさなか業者が懸命に配管工事等していた様でした。

そして一部学生有志が登校して「リヤカー」で実験器具を運ぶ「勤労奉仕」を致しました。2号館へのあの坂道が大変暑かったのが印象に残っています。

夏休みの後半は新設成った実験室で全員が登校して実習をしたと記憶しています。

今だったら学生も父兄も、又文部省当局も何か言ったのではないのでしょうか。

創設期、そして1期生だった為の苦労と思い出だったと思います。

これも理工学部60年の歴史の中の1頁にあった極く些細な出来事と申せましょう。

(工科校友会桜葉会々長)

## 編集後記

今年には理工学部創設60周年にあたり同時に短期大学部30周年になります。その記念号を発刊することになり皆様の絶大な御協力を頂き予想以上に原稿があつまりました。紙面の都合で一部原稿を来年3月発行予定の63号に廻さざるを得なかったことを残念に思います。原稿を頂いた方々にお礼かたがたお詫び申し上げます。

昭和55年10月27日発行

発行所 日本大学工科校友会

編集・発行者 有田 耕 政

東京都千代田区神田駿河台1-8

電話 03-293-3251内線206

振替 東京 3-162710

印刷所 有限会社 ムサシノ 総合印刷